地域学習「石打丸山スキー場」

―お仕着せでない体験学習を―

佐藤守正

一、新指導要領と体験的学習

新指導要領は、「知識の詰め込み」「覚えるだけの学習」を克服するために、「体験を通した学習」が大切だとしきりに強調する。

例えば、生活科は「体験活動」が核になる総合教科であるとし、社会科では「知識偏重の学習にならないように」「頭だけでなく体全体で学ぶ」体験的学習の徹底を提唱し、理科でも「覚える理科から調べる理科」にするために「探求活動・調べる活動」に重点を置くとする。「道徳」でも特別活動でも、「体全体を通した道徳指導」や「体験的活動」が強調されている。

このスローガンには私も異議はない。あらかじめ教師の側で用意したひとまとまりの知識をそのプログラム通りに提示していき、それを覚え込むことの早さと正確さを問うことが教育であり、子どもの側も「学習とはそういうものだ」とさえ思いこまされている現状からすれば、今、体験学習を強調することの意味は大きいと私も思う。

しかし、この「看板」に騙されてはならない。何のための「体験」かが問題なのである。

ここで言われている「体験」は、子どもたちの自由で生き生きとした、時にはハメをも外し、だからこそ驚き、発見し、創造し、想像力をふくらましていく子どもらしい「体験」とは異質なものが想定されているからである。

曰く「生活上必要な習慣や技能を身につけさせる」、曰く「公園など公共施設の利用のしかた」「家庭生活における自分の役割や生活の仕方」を身に

つけさせる……。つまり、「しつけ」として大人の側が子どもに要求し身につけさせたいと思う体験が用意されているだけと言ってもいいようなものなのである。体験が「しつけ」のレベルで規制されていたら子どもにとっては「体験」にはならない。

中学年の社会科は地域学習であり、それはまさに「体験学習」そのものである。その三年の「内容」に新たに「公共施設の利用と地域の活動への参加」の単元が加えられた。そして地域の清掃活動や交通安全運動への参加体験が用意されることになる。しかし、これもしつけに矮小化される可能性大の単元にしかならないだろう。

中学年というギャングエイジの子どもたちが、勇んで地域にとび出していき、地域の大人たちから聞き、自分の目で調べ、発見の喜びに浸れるような単元を用意して、真の「体験学習」をさせることがいま求められているのである。

二、「石打」における地域学習

三年生の社会科の主要な学習内容は、「地域の重要な生産活動」である。「地域の重要な生産活動は、自然環境を生かしながら営まれていること、その特色と工夫を理解すること、広く国内各地域と関わっていることに気付くこと」（新指導要領社会三年・内容4）が目標である。

わが校の三年生はその内容と目標にそって「農家の仕事」「工場の仕事」を学習してきた。そして指導計画はここで終わっており、スキー観光については触れることをしていない。郡単位で作成されている指導計画にそこまでは求めることはできないし、学級担任のほとんど全員が六年拘束人事の僻地展開者としてきている若者で占められているこの地域の小規模校では、その学校独自の地域教材を単元として組むことはなかなか難しいという事情もある。

しかし、石打丸山スキー場を校区に持つわが上関小学校では、その住民の八割以上が何らかの形でスキー産業と関わり、地域の経済のほとんどすべてをこの産業に依存し、その上、クラスの子供達のこれまた八割以上がスキー客相手の民宿やそれに関わる仕事を営んでいるという現状からいえば、スキー産業の仕事をカリキュラムに位置付けることをしないでは「地域の重要な産業」を学習したことにはならないといえよう。

加えて、ここ石打地区は、地区住民が「石打区地域開発規定」を作って大資本の恣意的な侵入を許さず、住民主体の地域経済振興を目指すリゾート開発をしている地域として、全国的にも注目を集めつつある所である。ますます激しくなるスキー場の過当競争の中で、この理想・理念を堅持しながら発展させていくには、自分の経営だけでなく地域全体を考えて行動できる後継

者の育成が不可欠である。地域を学習の対象とする中学年社会科は、自分の住む地域に対する愛情と誇りを育む学習として、また地域づくりの次の担い手を育てる学習の機会として、ここ石打地区では特に重要であると思われる。

すでに四年生では三年前から、「地域の発展に尽くした先人の働き」の単元として、数少ない地域に在住する教師を中心に「石打丸山スキー場の開発」が用意され、その教師が転出した今でも、それは四年生の学習内容として引き継がれている。それに呼応する形で三年生にも「スキー観光の仕事」の単元を用意することは、地域の学校としての上関小学校にとっては欠くことのできない教育内容といわねばならない。

三、さて、実際の授業（活動）は…

(1)クラス（三十三名）の中に、スキー産業に関わっている家がどれだけあるか調べる。

●民宿を経営している家＝十七名（もちろん冬季以外は農業 ●土建業の従業員などを兼業としている） ●土産屋、スキーレンタルなどのスキー関連の商店＝四名 ●スキー場の従業員（年間を通しての従業員とシーズンだけ雇用される者と）＝六名……以上は直ぐ判明したのであるが、なかなか結論が出なかったのは、魚屋（仕出し）、理髪業、洋品店であった。甲論乙駁の末、親に聞いてきてもらいその報告を受けることにした。翌日の報告によれば、●魚屋＝週末になると民宿への仕出しで大忙し、私も配達を手伝わさせられる。冬のほうが忙しいので関係がある。●理髪業＝夏は週末が忙しいが、冬は週末が暇になる。民宿の従業員などで石打の人口が増えるので冬の方がお客さんは多い。●洋品店＝ぼくの家は関係がないとお母さんが言ってたよ、と報告するのでそれはそれでよしとする。　結局、病院、工場勤務などの給与生活者四名だけがスキー観光と無関係、他は何等かの形で「スキー」と結び付いていることが確認できた。

(2)「スキー観光の仕事」で調べたいことを考える。

子どもたちの出した課題は次のようなものであった。

●お店の仕事に関わって

レンタルのスキーがいっぱいあるけど、あれはみんな買ってきたのだろうか。「スーパーはりまや」は民宿の注文を受けて配達をするけど、どこまで配達をしているのか。

●民宿について

自分の家で泊まったお客の最高の人数は。

お客さんはどこからくるのか。なぜ石打を選んだのか。忙しい日、父や母は朝から夜まどどんな仕事をしているのか。お客さんにたくさんきてもらうための工夫は。

●スキー場について

スキーリフトは夏はどこにしまっておくのか。たくさんの働いている人は、

夏はどうしているのか。スキー場に何人お客さんがきたか。それはどうやって調べるのか。

もちろんこれらの課題は、子どもたちの学習への興味と意欲を沸き立たせるための導入である。子どもたちの思い付く所からまず調べ始め、その過程で子どもたちの疑問や課題意識がさらに広がり質が高まっていくことを期待している。

私の意図は、スキー観光産業の中核でありかつ圧倒的多数の子どもたちの家の生業である民宿経営の、工夫と努力、その辛さと喜びに気付かせ、自分の親の生きる姿に具体的に触れさせたいというところにあるのだが、あらかじめ私が予定している学習項目は、子どもたちの活動が進展する中で当然加除訂正されるはずのものである。この地域に対する理解が不十分である私に対する親からの助言も期待している。

⑶ スキー客へインタビューをする。

子どもたちの最初の活動は、自分の家に泊っているお客さんにインタビューすることであった。これは最も宿泊客の多い土曜日の晩、それも客が一番くつろいでいるとき（夕食が終わってナイタースキーに出かける前）それぞれの部屋を訪問しようということになった。尋ねる事は、「お客さんはどこからきたのですか。多くのスキー場の中から石打を選んだのはなぜですか」である。

活動の時間が土曜日の夕食時と限定されるため、クラス全員の参加を期待することは初めから無理であったが、それでも民宿の子を手伝ってインタビューに参加した子も多く（一人では心細いので、他に援助を頼んで複数で）、結局、調査に参加した子は二十名、緊張しながらも十五軒の民宿の四百三十名程のお客にインタビューすることができた。

次の社会科の時間に、インタビューの結果を持ち寄って発表しあった。

● お客はどこから来ているのか

東京二四五人、埼玉六人、神奈川四三人、茨城四一人、千葉二二人、群馬一二人、新潟六人、地図に表してみるとすべて東京周辺である。なぜそうなのかを考えて、あらためて石打丸山スキー場が新幹線・関越自動車道で関東と深く結び付いていることを実感した子どもたちであった（うちの父ちゃんは、東京から長野に行く新幹線や高速道路ができたら、お客はそっちへ行ってしまうと心配していたよ、の声あり）。

● なぜ新潟県のお客は少ないのか

子どもたちから当然出る疑問である。「新潟県はあちこちにスキー場がいっぱいあるから、わざわざ石打までは来ないのだ」派と、「いっぱい来ているけど、近いから日帰りするのだ」派の論争の結果、駐車場を調べればよいということになって、その日の下校時、手分けして区内三箇所の公営駐車場を調べた結果、長岡・新潟ナンバーの車もたくさんあることを確認。こんな時の子どもたちの行動は実にすばやくか

つ意欲的である。

● お客さんはなぜ石打を選ぶのか

何と言っても東京から近いから。スキー場が良い。広くていろんなコースがある。コースがよく整備されていて荒れていない。宿が気にいっている。子どものころから来ているので親戚みたいになっている。宿のおばあちゃんに会いたくて毎年来ている。テレビのコマーシャルや雑誌の広告を見て。

子どもたちは、石打丸山スキー場がスキーヤーたちから高い評価を得ていることをあらためて知ってうれしそうな表情をすると同時に、次は民宿のお母さんたちにインタビューしてみたい、と言い出すのである。

(4) 民宿へ聞き取り調査にでかける。

子どもたちの家の民宿で、都合がついて受け入れてくださるという九軒へ、三名程のグループで訪問した。質問する項目をみんなで相談し、質問の担当者を決め、質問の仕方を練習してでかけた。私はその民宿へ事前に電話して子どもたちの訪問を依頼し、加えて訪問のマナーなどについても指導すべきはしていただきたいとお願いしておいた。質問項目は以下の通りである。

▽お客さんにたくさん来てもらうためにどんなことをするか。▽シーズンにはいる前の準備と終わってからの後始末の仕事はどんなものがあるか。▽お手伝いさんはどうやって見つけているか。その人はどこから来ているのか。▽今困っていることはないか。それはどんなことか。▽そのほか新しく気付いた質問。

各グループとも学校から直接でかけたのであるが、挨拶や質問の練習をしながら小走りにそれぞれの訪問先に向かった子どもたちであった。

「学校が終わってから、里美ちゃんと仁くんと則行くんで私の家にインタビューに行きました。みんな走って大いそぎで行きました。

玄関で班長の則行くんが「スキー観光の勉強でインタビューさせてください」と大きな声で言う予定だったのに、ちょっと小さな声で言いました。お母さんはかまわず「あのスリッパをどうぞ」とお客さんに言うみたいに言いました。みんなで食堂へ入りました。

お母さんだけでなくお父さんもきてくれました。初めに則行くんが下を向いてちょっと小さな声で、「おねがいします」と言ったので、仁くんが「もうちょっと大きい声で」と言いました。それから里美ちゃんが、学校でするみたいに立って「お客さんにきてもらうためにどんな工夫をしているのですか」と聞きました。そしたらまず、「暖かい食事を出すこと、それからお客さんに笑顔で元気におうたいすること、それからお客さんの言うことを良く聞いてやること、あ、それからうちのパンフレットも作ってお客さんに配っているよ」と、お父さんがしんけんな顔で言ってくれました。……中略……お父さんもお母さんも、え顔でお客さんをむかえて、おいしい食べ物を作っ

てお客さんを大切にしているけど、朝が早くて夜がおそくて大へんだなぁと思いました。」（佳菜子）

(5)民宿の父母の一日の仕事を追跡する

父母は実際にどんな仕事をして忙しい一日を過ごしているのか調べてみようと課題して、可能な限り父母の動きに密着させ、記録させてみた。夜遅く着くお客を待って一時まで起きている父親、朝五時から起きだして朝食の準備を始める母親、午後のちょっとした昼寝の時間以外は働きづめの父母をあらためて見つめた子どもたちであった。

「お母さんはときどき、くたびれて腰がぬけそうと言っているけど、ほんとうにそう思った」「お母さんは、いやなことがあった時もお客さんが来るとにこにこ顔でむかえに出ます」などとこの日の日記にも書かれていた。

四、お仕着せでない体験学習を

この授業のまとめとしての「わかったこと・感想発表会」で、私は、「大きくなったら民宿の仕事をやってみたいと思っている人」と問うて見た。結果はやりたいとするものは約半数、あとの半数は嫌だと言う。「やりたい」という子の大半は民宿の子。「お客さんと友達になれるし、お金が儲かる、お客さんと話したり世話をしたりするのが好き、親からおまえが跡継ぎだぞと言われているから」がその理由である。対していやだと言う子は、「お母さんを見ているとくたびれていてかわいそう。夜遅くまで起きていたり朝早かったりするのは嫌だ。お母さんの手が荒れていて、私もあんなになりたくない。ペットが飼えないから。晩ご飯がゆっくり食べられない。」などなどである。この拒否反応は親の姿勢も反映しているものと思われる。

かつての、出稼ぎをしないでも暮らせる道を求めてスキー場開発に懸けた世代はすでに引退し、経済的にもある程度余裕のできた二世代目の親たちの中には、このあくせくした暮らしのままでいいのだろうかと迷っている人達もいるだろうからである。

短期間とは言え、殺人的に忙しいこの仕事を人間的な余裕のあるものにしていくことは、この子供達の世代になってからの課題である。その課題に正面からぶつかっていってくれるだろうと私は期待している。

この学習の中で、子どもたちは、工場見学に引き連れて行かれるようなお仕着せの体験学習ではない、自分の才覚と度胸を試される体験学習を経験することができたと思う。子どもの意欲と学ぶ喜び、自分たちの力を自覚することの喜びは、こんな体験学習の中から出てくるのではないだろうか。

（さとう　もりまさ＝南魚沼郡・上関小学校）